

## ことばとモノ

著者	笹原 亮二
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	68
ページ	87-104
発行年	2007-03-26
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001443">http://doi.org/10.15021/00001443</a>

# 1. ことばとモノ

笹原 亮二

## 1 はじめに

我々はこの世に生を受けて後、成長するに従い、ことばを聞き、話し、書くことを習得する。そして、日々様々な局面で、様々なことばを用いて生活を送るようになる。その一方、我々は、自らの身体とは別個に存在している様々なモノに接し、道具として使用したり、所有したりして日々の生活を営むようになる。その結果、我々の生活においては、ことばとモノが欠かせない存在となるに至っている。

ことばとモノという思い出す光景がある。それは、以前見た『奇跡の人』の舞台の一場面である。ヘレン・ケラーの幼少期を描いたこの作品では、視覚と聴覚に障害を持つ彼女がモノに名前があることを初めて理解する場面がクライマックスに配されている。それは、日々の生活におけることばとモノとの密接かつ重要なひとつの関係性を示して印象的である（ギブソン 2003）。

しかし、その舞台は、ことばとモノの関係を、「モノに名前がある」ということだけですべて片が付くような単純なものとして描いているわけではないことには十分注意する必要がある。また、そうした関係の複雑さは、両者を巡る実際の状況を少々思い起こしてみても容易に納得される。例えば、同じことばなのにそれが指すモノが異なっているといった事態は、異なる場所で生まれ育った人と話をしている際にしばしば経験することである。また、我々は、自らの行為や保持している知識や技術を総て言語化して自覚しているわけではない。モノの道具としての使用は、多くの場合それを用いる身体的な技術を伴うが、その習得や行使は細部に渡ってことばによって規範化されているわけではなく、我々は多くのことを、ことばでは説明できなくても、実際に行うことが可能である。こうした例は数え上げればきりが無いが、そうした事実は、我々の生活において、ことばとモノが、常に「指し示すもの／指し示されるもの」あるいは「説明するもの／説明されるもの」というかたちで対応して存在しているわけではない、つまり、ことばとモノは必ずしも直線的に結び付いているわけではないことを示している。

そこで本稿では、そうしたことばとモノの関係を踏まえて、民俗学において従来行われてきたモノ研究、民具<sup>1)</sup>研究の流れを整理し、国立民族学博物館所蔵の大村しげコレクションの4万5千点に及ぶ膨大な数のモノの群を実際の事例として視野に納めつつ、モノを通じた生活文化の研究を果たしてどのようなかたちで進めることが可能か、その方法や資料論の構築に向けて、若干の私見を述べてみたい。

## 2 モノとことばの一致

民具研究においてことばとモノの関係を考えた時、民具の名前、即ちその民具がどのように呼ばれているかという呼称への関心は、最も根元的で重要な問いのひとつといえることができる。アチック・ミュージアムを創設し、「民具」という用語を生み出して、民俗学における本格的な物質文化研究の先鞭を切った澁澤敬三は、民具とその呼称を巡って次のような指摘を行っている。澁澤は、「民俗学に、今迄生物学的とでも云い度い様な、実証的研究法があまり用ひられて居らぬことを、聊か不満に思つて居た」という。それは、「方言の研究にしても、仮名だけで集めた時の危険は想像以上で、ビクと居ひ、カゴと居ひ、フゴと居ひ、モッコと居ひ、その何れにしても実物なしでは本体の解らぬものが多い」。つまり、「仮名や文字の上だけで幾ら集めて議論しても、実は初まらない」（澁澤 1933: 5-6）というわけである。

澁澤やアチック・ミュージアムの同人の間で「民具」という用語が用いられるようになり、民俗学における物質文化研究、即ち民具研究が本格化したのは 1933（昭和 8）年前後とされる。澁澤の指摘は、民具研究が始まって間もない早い段階から民具の呼称に注意が払われていたことを示している。

当時アチック・ミュージアムは、全国各地のアチック同人を通じて精力的に民具の収集を行っていた。そして、民具がアチックに多数集まってくるに連れて、民具の整理や研究を巡って様々な問題点が浮上してきた。その 1 つが民具の呼称であった。同じような名前と呼ばれている民具も、地域が違つると必ずしも同じような形態をしているとは限らなかった。また、同じ形態の民具が、地域が違つると異なる名前で呼ばれている場合もしばしば見られた。各地で人々に実際に用いられてきた民具は、呼称と形態が全国一律に 1 対 1 で対応しているわけではなかったのである。従つて、当人は、同じ呼称の民具のデータを収集し、比較して、同じ形態や機能を有する民具を研究したつもりでいても、実際は別の形態や機能を有する民具を比較している場合が生じてしまう。民具の呼称のみを頼りに比較検討を行つても、民具自体を研究することに直接的に繋がるわけでは必ずしもないのである。そこで、澁澤とアチックが民具を基礎的な研究資料として定位するために先づ必要と考えたのは、それぞれの地域において個々の民具がどのように呼ばれているかを正確に把握すること、つまり、モノとことばの一致であった。澁澤らの民具の呼称への注目は、人々の生活の現場では、地域や歴史、個人の保有する知識や情報の質や量の違ひなど、モノが存在する文脈に応じてモノとことばの結びつきは様々で、両者が常に直線的に結び付いているわけではないといった、モノとことばの錯綜した関係の発見という逆説的な経験を契機とするものであった。

こうした澁澤とアチックの民具の呼称に対する関心は、その後のアチックの民具の

研究においても様々なかたちで実行に移され、成果をあげていった。アチックの同人であった内田武志は静岡県内の方言について精緻な調査研究を行い、その成果を『静岡懸方言誌』として著した。方言の研究書でありながら「第三輯」は「民具編」とされ（内田 1941）、事実上その地域の民具を網羅した民具誌となっていたことは、その1つの現れといえる。

### 3 民具調査の現場

澁澤らの民具の呼称への関心は、民具の調査法にも見ることができる。アチック・ミュージアムにおいて民具研究が本格化して間もない頃に、民具の収集や調査の手引き書として作成された『民具蒐集調査要目』（アチック・ミュージアム 1936）では、民具の使用者や所有者から得るべき情報として、名称・採集・製作・使用・分布・由来の最低6点が基本的な調査項目となるとして挙げられている。名称に関しては、現地での呼称を方言によって採録し、仮名書きで記述し、その際には別の呼称の有無を確認すると記されている。また、呼称以外では、由来や使用その他について俗信・伝説はないか、いつ頃から用いられはじめたか、何処から伝えられたかといった点も調査項目として挙げられている。

こうした呼称を初め、由来や俗信など、民具の使用者や所有者からことばを介して伝えられる知識や情報の重視は、その後の民具の調査や研究にも受け継がれて現在に至っている。民具を日々の生活において人々が用いる「日常卑近の道具」と定義すると、その調査は、まずは道具としての形態や使用の状況に関する詳細な観察が想起される。しかし、実際の民具調査では、そうした観察と同等、あるいはそれ以上に大きな比重を占めるのが、民具に関して聞き取りを行うことなのである。

使用者や所有者から民具に関する話を聞くことに関しては、民具の調査研究の方法としての重要性が従来から多くの研究者に指摘され、実際に行われてきている。宮本馨太郎は、「民具調査には大別すると聞き取りと観察の二通りの方法」があり、聞き取り調査とは「話者との会話の中から耳を通して記録していくやり方」で、まずはその地域の生活全般の様相に関する聞き取りを行い、「ノートにその折出てきた民具の呼称を素早くメモ」し、一通り聞き終わったら、改めてそれらについて調査するという「二段構え」で行うと述べている。更に宮本は、聞き取り調査は、実際に現存し、使用されている「現行民具」に止まらず、「物そのものはすでに残っていないまでも古老などの記憶の中に伝承されていたり」、「一生に一度とか、ある一定期間だけ」に使用される「潜在民具」についても調査が可能と、その一層の有効性を指摘している（宮本馨太郎 1979: 123）。

中村たかをも、民具に関して第一次資料となるのは、その民具を使っていた人達か

ら聞いた「生の話、生の声」である「<sup>ききとり</sup>確実な聞き取り資料」で、調査にあたっては、「その民具の使い手の呼慣わしや言い方には、その土地の人達の考え方や意味付け、いわゆるフォークイメージが反映されているから」、「使った人達の気持ちが汲み取れるように（使った人達の言い廻しは角カッコにでも入れて、聞き手の意見や解説とは明らかに区別出来るような形にでもして）記録」して、「フォークイメージを第一次資料として」記録することが重要と述べている（中村 1981: 259-260）。こうした宮本や中村の主張からは、モノの形態や機能に勝るとも劣らず、モノに関することばの世界、そして、ことばを通じて表現される人々の心意や価値観といった側面に関心を寄せてきた従来の民具研究者の姿勢が見て取れる。

天野武は、特定の民具について、年中行事や儀礼の祭具として用いたり、収納の仕方に呪的な禁忌が伴ったり、使用不能になったら徹底的に破壊して棄却したりといった、民具の道具としての実用的な合理性を越えたあり方を、民具を巡る俗信として取り上げて論じている（天野 1983: 245-248）。天野の研究は、民具に関する人々の意識や意味付けに焦点を定めた民具研究という意味では宮本や中村と同様の姿勢と見ることが出来るが、注目されるのは、議論が文字の問題にまで及んでいる点である。天野は、「民具に墨書や焼印が付されている例は少なくないものの、それは一体いかなる目的をもつのであろうか」と、民具と文字との結び付きに注目する。民具に記されるのは、記年銘、家名や氏名の墨書、奉納者や寄付者の名前の陰刻などであるが、それらの記し方や内容は、民具の使用や管理のあり方、即ち人々が民具といかに関係を取り結ぶかに密接に関わっていて、「それらの民具がどのような年代に製作され、だれによって所有されてきたかを知る上で貴重なばかりでなく、いかに使われ、いかなる生活にどう機能してきたかを理解するために看過されてはならぬ」、つまり、「庶民自身がいかなる感情を抱いてそれに対処しようとしたか」、「民具に対するこころ」の現れと見ることが出来る。そして、民具に文字を記すことは、それを大切に扱ったり、所有の状況を明確にしたり、日々の活動の記念物にしたりといったかたちで、民具と人との個人的あるいは社会的な関係をより強固にしていると指摘している（天野 1983: 237-242）。

## 4 モノの呼称

従来の民具研究において、モノとことばを巡っては、前述のようにモノの呼称とモノに関する話の2点が重要な問題とされてきた。そこで、それぞれについてやや詳しく見ておきたい。

モノの呼称、即ち民具の名称を巡っては、同じ民具も地域が違えば異なる名称で呼ばれるという澁澤敬三以来の地方名の問題が注目され、重要な調査項目とされてきて

いる。例えば神野善治は、「民具の名称を問題とする場合、先ず大切なのは、その民具をその使用地で何と呼んでいるか」、つまり「民具名の方言」であり、それは「一種の民俗語彙」とみなすことができるので、それらの分布状況を整理分析することによって、その民具の名称やモノ自体の変遷・地域差・伝播や流通などを導き出せる可能性があるとしている（神野善治 1985: 16-17）。

こうした認識は、神野自身も述べているように、民俗学における「民俗語彙」の発想が背景にある。民俗語彙とは、端的に言えば「土地で行われている生活用語」、特にその中でも「民俗を採集し、記述する場合に標目索引として採用」したものを指す民俗学の術語である（民俗学研究所 1955: 7）。民俗語彙においては、「文献の上からは中世以後消え果てたと思う古語が、邊土において口言葉に残って」いたり、各時代の文化的中心から遠く離れた「全然縁もない、何ら持ち運んだ痕跡のない離れた場処の人々の間に、幾つかの目につく一致が現れ」たりというかたちで、「言葉だけは、全然氏名も知らないような我々の同種族の者の、五百年八百年以上の生活振りが、兎に角に残っておる」。従って、全国各地の様々な民俗語彙を大量に収集し、分類し、比較することで、「田舎に住む人々の、生活変遷を部門別に跡づけ」、「日本人の生活がどんな風に時代とともに発達改良し、また同時にどのくらいの程度に昔のものを保存しておつたかを見る」ことが可能になる。つまり、民俗語彙は、民俗事象の調査・整理・分類のための単なる指標に止まらず、それが指し示す民俗事象の内容とともに「生活史の資料」となるというわけである（柳田 1955）。

民具の地方名を生活史の資料と見る視角は、実際の民具研究において一定の成果を挙げていて、研究方法としての有効性を確認することができる。河野通明は、牛馬にまつわる飼育施設や馬銜・犁といった民具が各地でどのように呼ばれているか、それらの呼称の違いに注目して、大陸から日本列島への畜力を用いた農耕具と耕作技術の伝来と受容の歴史的過程を論じている（河野 2000）。民具を歴史資料として見た場合、「民具の地域呼称はその民具が地域にデビューした時点の情報を持っており、伝来や伝播の時代を何世紀と絞り込む手掛かりとなる」（河野 2003: 29-30）というわけである。

## 5 命名と造語

民具の名称を巡っては、地方名を生活史の資料と見る関心の一方で、その地方の人々がその民具に対する何らかの意図に基づいて名付けた結果と見て、その経緯に注目する命名の問題も研究者の関心を集めてきた。前出の神野善治は、「常民が日常生活で用いるモノをどのように認識しているかを、モノの命名法から考え」という「民具の命名論」は、「地方名を通して常民の民具に対する命名方法を知り、ひいては

民具の把握の仕方、民具のはたした社会的役割を知ることでもできる」と、研究方法としての可能性を指摘している（神野 1985: 17・20-21）。

民具の命名への注目は新しいものではなく、澁澤敬三に既に見ることができる。澁澤は、「民具名称の発生変化分布に注意を要することは勿論であるが更に名称附与の根本法則を把へることが出来れば幸」（澁澤 1935）と述べていて、ことばとモノの一致や呼称の分布や歴史と共に、命名法についても早い時期から注目していた。澁澤自身、国内に生息する魚について、全国規模の魚名の集成や魚名と魚種の同定に加えて、魚名の命名や魚方言の成立、同名異魚といった命名を巡る問題について検討を行い、「社会的所産である魚名」が「時と所と人により多くの場合複雑なる変化を示す」（澁澤 1959: 11）としてその具体的な様相を詳細に論じている（澁澤 1958・1959）。

民具の命名論は、柳田國男以来の民俗学における命名や造語を巡る一連の議論の流れにおいて理解することもできる<sup>2)</sup>。柳田の事物の名称に関する認識の基本は、「物の名即ち物の実体を表すといはれる名称が、すでにひとつの言語芸術」（柳田 1980: 159）ということである。柳田によれば、「現在日本で用ゐられている単語は、十万乃至十二万位といはれて居るが、此大部分が新語である」（柳田 1980: 160）。つまり、事物の名称は元々存在していたものでもなければ自然発生したものでもなく、ある時期にある人がその事物に命名して生まれた新たな言葉、造語というわけである。こうしたかたちで「無名ながらも何人か必ず、衆に先立って此選択を試みた者があつた以上は、之を芸術と名付けて聊かも其不可を見ない」、即ち、事物の名称は、人々による意識的・意図的な創造の結果として、短いながらも「言語芸術」といえるとしている。

それでは、言語芸術としての命名や造語にはどのような特徴があるのか。藤原与一によれば、事物の命名や造語は基本的に、人々の日々の生活に密着した内容・表現となるが、それに加えて次のような特徴が認められる。柔軟で得意即妙で、時には気楽で気ままな命名が行われる「想の自在性」、非行を論難したり風刺や皮肉を込めたりする「批評意識」、事物への関心や興味に基づいて名付けを面白いがる「あそび」、大げささや誇張を伴うたとえで言い表す「比喩」、見たまま感じたままを擬声的・擬態的表現なども用いて描写する「直写直述」、戯け・駄洒落・冗談・軽口などの卑俗な笑いに通じる「滑稽感」、年中行事・儀礼・祈願などに伴う「信仰・敬虔・丁寧」、日本語による表現としての「文法・音韻上の制約」、音感・音数・漢語の使用といった「音のこのみ」などである（藤原 1959）。

こうした特徴は、命名や造語が作り手の意識や意図に応じてかなりの程度自由奔放に行われてきたことを示している。しかし、生み出された総てのことばがその事物を指し示す名称として定着し、用いられるようになるわけではない。定着し、用いられるためには、そのことばが、人々のその事物に対する認識や感覚に合致した、しかも快い表現として、人々に支持・承認される必要があった。事物に対して人々が漠然と

抱く「感じを覚るに敏な者が、代表して総員の言はうとするところを言つた」ことばに人々が同意し、承認すると、それがその事物を指し示す新たなことば、即ち名称として受容され、定着し、使用されるようになる。その意味で、命名や造語は、あくまでも「聴衆に支配されるものであつて、代表者と群衆の合作」であり、「聴衆の文芸」(柳田 1980: 165)なのである。

柳田以来の民俗学のこうした命名や造語への注目を、佐藤健二は「言語文化の発生を、命名や新語の局面でとらえようとする立場」から、「話すという実践の総体を、その新表現の生産力にそって統一的に把握しようとした」ものであり、「耳の強調、すなわち作者の創作から読者の実践へという文学史的な焦点の移動」であったと指摘している(佐藤 1997: 167・171)。命名や造語は決して偶然・無作為に行われたわけではない。何らかの意図をもって行われ、しかも、個人的な行為ではなかったのである。民具の呼称をこうした命名や造語の結果として考えるならば、それが、その民具を地域社会や特定の集団がどのような経緯と認識の下に受容し、保持し、用いてきたかを探るための重要な手掛かりになってくる。

## 6 モノと話

従来の民具研究において、モノに関する話、即ち、民具の使用者や所有者から聞き取った内容が重視されてきたことは前述した。しかし、民具とそれに関する話の関係もまた、それ程単純なものではない。

榎美香は、房総半島南部の鍬について、形態・構造・用途・自然条件などを指標として分類・分析を試みているが、その際に、鍬の地域毎の差異に関する情報について、鍬を製作する職人よりも「使用者である農家のほうが語られる項目が少なく、自分の使っている鍬が他と比べてどういう特徴があるのかを説明しない」と述べている(榎 2002: 5)。同様のことは筆者にも経験がある。神奈川県北部では、麦類や陸稲の脱粒・脱穀に唐棹がかつて用いられていたが、打ち棒と柄の形状や材質や大きさに地域的な違いが認められる。かなり明確な違いでありながら、使用者や所有者は自らの唐棹が隣接地域の唐棹と違っていることに言及することはほとんどなかった(笹原 1993: 29)。また、宮本馨太郎によれば、民具の使用者や所有者に対する聞き取り調査の際の調査項目としては「名称・採集・製作・使用・分布・由来の最低六項目が基本となる」ものの、「民具は一般にその起源・由来の明らかでないものが多い」と述べている(宮本馨太郎 1979: 125-127)。これらのことは、民具について、使用者や所有者はいつでも総てのことを明快に話してくれるわけではないことを示している。

民具が人々によって常に話される対象ではない、つまり、常に説明され、情報がもたらされるわけではないという事実は、民具とそれに関する話を、説明される対象と



説明の内容といった単純な対応関係として理解するだけでは十分ではないことを示している。それでは両者の関係をどのように理解すればいいのか。そこで、差し当たり問題としたいのは、人々が民具について話すのはどういう場合か、そして、その話にはどういう特徴があるかということである。

使用者や所有者が民具について話す機会として先ず想起されるのは、質問に回答する場合であり、そうした質問者としては、民具について「名称・採集・製作・使用・分布・由来」(宮本馨太郎 1979: 125)といった情報の収集のために調査にやってくる研究者を第一に挙げることができる。

民具の調査研究に関して中村たかをは、「第一次資料」は「<sup>ききとり</sup>確実な聞き取り資料」であるが、「集める側の聞き方、教わり方によって第一次資料の精粗に大きな相違が出る」と述べている(中村 1981: 259・261)。そこには、民具に関する話とは、誰がどう質問しても相手と同じように話してくれる民具に関する固定的・絶対的な情報ではなくて、質問によって引き出された結果としての可変的・相対的な情報とする認識を見ることができる。

大門哲の民具に関する「談話」調査の議論も中村と同様の認識に基づいているが、大門は更に、モノに関する語りは質問者と回答者の協働作業の結果としているのが注目される。大門は、モノと言葉の関係について、「モノはつねに群となったほかのモノとの配列のなかで価値をおびる「コトバ」でしかない」とする基本的な認識を表明する。そして、「モノ像は記録(聴取)可能な客観的情報として存在するのではなく、「談話という場において、話者と調査者がモノの記憶を互いに協働させ辻褄をあわせるなかで構築される」と指摘する。モノに関する「コトバ」は、「話者(=回答者)→研究者(=質問者)」という一方向的な関係において研究者側にもたらされるのではなく、「談話」という双方向的な関係において「創出され共有される」。しかも、そうした「コトバ」は、話者の「身にしむ言語」を包含する「エピソード記憶」として「零れ話」・「思い出話」的な性格を有し、「その発話は聞き手に話し手と同じ状況(記憶)にたちあってもらい「思い」を共感してもらおうとする技法性をもつ」。つまり、民具に関する「談話」調査によって得られた情報は、「思い出」として「話者がかつての自分を再現し、かつ聞き手はその場に臨むことができる点、話者の「身(思い)になれる物語」となる<sup>3)</sup>。民具に関する情報は、使用者や所有者と調査にやってくる研究者との接触が契機となり、両者の協働作業によって、使用者や所有者の反省的な思い出話として紡ぎ出されるというわけである。

研究者が民具の所有者や使用者から聞き取る情報は、その民具に備わった普遍的・客観的な内容ではなく、程度の差はあっても、所有者や使用者が保持する知識や体験が談話を契機にその都度反省的に再構成され、言語化された可変的・相対的な内容の話でしかあり得ないとする大門の指摘は、話と民具が「説明する／説明される」と

いった単純な関係にあるわけではないことを改めて気付かせてくれる。人々が民具について話す行為を、民具に関する単なる情報提供と見るだけでは十分とはいえないのである。

香月洋一郎は、従来の民具研究は、「何らかのかたちでのモノとの関わりの実感を前提に」していたと指摘する。この場合の「実感」は「道具感覚」を意味する。民具は基本的に「日々使い込まれる」生活道具であり、「消耗品であったが、同時にまた、欠ければ常に容易に入手しうるといったものではなく」、「貴重品的な性格をもあわせ持っていた」。民具は人々にとって、日々の生活を営むために、それを入手し、適切な維持管理によって保持し、使用し続けることが重要かつ不可欠とされる存在であり、そうした民具が有する実感を前提にこれまで研究が行われてきた<sup>4)</sup>。しかし、こうした民具の実感は、日々の生活と生計を維持するための経済活動と乖離していない、かつての「生産社会」において見られたものである。昨今の「消費社会」的な状況においてはそうした実感が必ずしも成り立っているわけではない。人々とモノとの関わりは今や「消費活動」となり、モノの使用や所有による「自己確認や自己主張」といった実用性以外の「付加価値」が、実用性と「同等かそれ以上の比重を占めるような状況が大きく作用する」に至っているとしている<sup>5)</sup>。

ここでは、香月が民具の生活必需品的な道具としての実用性とは異なる役割を挙げている点に注目したい。そうした役割が消費社会特有の今日的な現象か、実用性に対する付加価値の位置に止まるのか、その判断は微妙であるが、ここでは香月の見解を、民具を生活維持のための使用に直接的に結び付く道具感覚の実感においてのみ考えることが、生活現場に存在するモノの理解として十分ではないという指摘と考えておきたい。そしてそれは、話と民具は常に「説明する／説明される」といった単純な対応関係にあるわけではないとする先の大門の指摘とも符号する。人々が民具を巡って他者との談話的状況において発する零れ話や思い出話は、ある種の自己確認や自己主張と見ることもできるからである。

そうすると、話と民具の関係を考える場合、民具の側から理解を試みるだけでなく、民具の実用性と一旦距離を置き、話の側から理解を試みるという視角も必要となるのではないだろうか。人々が口にする話の中に、民具あるいはモノがどのようなかたちで現れるのか。そしてそこには、人々と民具あるいはモノとのどのような関係が認められるのか。

## 7 話とモノ

大門哲は、民具に関する話を、所有者や使用者の過去に獲得した知識や体験の再構成の言語化と指摘していたのは前述の通りであるが、モノに関する話、口頭伝承のあ

りようが、人々の過去に対する意識、歴史認識と深く関わっていると見る見解は、彼以外のほかの研究者においても見ることができる。

小池淳一は、源義経主従の奥州に落ちのびた旅を巡る平泉以北の伝説群の近世における様相を、伝説にまつわる事物に着目して検討している。小池が注目するのは固有名詞を有する実在の事物である。各地には、義経主従にまつわる岩石や樹木や池泉などの自然物、彼らの持ち物とされる品々、彼らが物資を借用した際の証文、義経の従者の末裔を称する家といった様々な事物が、それらに因んだ伝説と共に存在している。そうした事物と伝説の関係は、事物を根拠に「伝えられてきた伝説に新たな光があてられ」たり、「伝来の不明確な事物に伝説が与えられ」たり、伝説が「逆に事物を生み出し」たりして、「伝説とは事物に集約されるものであるとともに、事物それ自体を作り出す」という双方向的なものであった。伝説は具体的な事物、モノと結びつくことで、単なる伝説に止まらない、実在の歴史としてのリアリティを獲得し、事物もまた過去から伝わった伝説と結びつくことで、実在の歴史の証拠としてのリアリティを確固たるものにしていった。義経伝説ということばの世界は、様々な実在するモノと一緒にあって「人々が歴史的世界への関心を紡いでいく力となっていた」というわけである<sup>6)</sup>。

伝説が実在の事物を参照点として獲得することで、人々の間で歴史認識の生成や共有が促進されるのは、近世の義経伝説に特有の現象ではない。鈴木正崇は、岩手県宮古市津軽石地区で行われている又兵衛祭りを巡って類似の状況を指摘している。鈴木によれば、「祭祀にはその起源や由来、意味についての伝承を伴う場合が多いが、「過去に実際に起きたとされる出来事を記念する祭祀」の場合は「具体的な地名や人名、モノなどを挙げる伝説が多く語られ」、それらが実際の祭祀においても祭場や祭具などのかたちをとって登場することが少なくない。又兵衛祭りも例外ではなく、藩の禁制を破って村人に鮭をとらせて磔に処せられたとされる又兵衛の霊を祀り、合わせて豊漁を祈願するという、祭りの由来を物語る伝説が伝来し、祭りにおいて又兵衛を象ったとされる藁人形が祭具として実際に登場する。祭りの形態や祭りに関わる伝説は時代や社会状況の推移に伴い刻々と変化して、人々による様々な解釈や意味付けがその都度行われてきたことを示しているが、「その中核には解釈や意味を紡ぎ出すカタチがあり、又兵衛人形が焦点で、正統性の媒体」となってきた。つまり、祭りと伝説を巡っては、祭りに登場する又兵衛人形という実在のモノを介することで、人々の祭りや伝説に関する意味付けや解釈の形成、正統性の主張が行われてきたのである。又兵衛人形は、祭りや伝説の意味や解釈の生成の契機となると共に、その正統性を支えるモノとして、その実在性において有効性を発揮してきた。その場合、モノと意味や解釈は、「カタチは何かを造形し、想像を生み出し、観念を固定化させ、それにつき動かされて、再び造形を変えていく」といった相互に影響を与え合う双方向的な関

係にあり、そうした「相乗効果」の中で、祭りに関する人々の歴史認識が更新され、その正統性、リアリティーが強化されてきたのは、前述の義経伝説と同様である<sup>7)</sup>。

ことばの世界が人々の歴史認識と深く関わっているのは、伝説や祭祀といった特別の場合に限ったことではない。日常的な世間話<sup>8)</sup>においても同様である。山田巖子は従来の世間話研究について、世間話の「語られる〈場〉」、「語る〈ことば〉」、「支える〈共同体〉」に注目して検討を行っている。そして、世間話が語られるのは「説明」としての先例が求められる場<sup>8)</sup>で、「経験の先例としての話は、かつての社会において、ものごとを判断していく重要な根拠となった」こと、先例としての「経験」は「話」によって形を与えられ、共同体で共有された「記憶」として機能していくこと、その際には、諺や慣用句や類型的な話のパターンといった定型的な表現が、「個人的な体験を普遍性のある話へと変化させる技術」として用いられ、その結果、一見個人的な経験譚のように見える話であっても、経験が他者と共有される共同性が無意識のうちに成立していることを指摘している<sup>9)</sup>。山田が挙げた世間話の特徴は、人々が日常的に交わしている話が、過去の先例や経験をリソースとするが、そのままではなく一定の型式に整序されているという意味で、話し手の一種の歴史認識となっていて、伝説や祭祀の場合と共通する。更にそれが、話し手個人を越えた普遍性、共同性を有し、共同体の記憶としての性格を帯びていることは、伝説や祭祀との一層の共通性を感じさせる。

こうした世間話のありようと、先に見た伝説や祭祀とモノとの相互作用を併せて考えると、世間話においてもモノへの言及は伝説や祭祀の場合と同様に、人々の歴史認識の形成とそのリアリティーの強化を促進させるという予想も十分可能であろう。また、人々の過去への意識や歴史認識的な性格が、伝説、祭祀、世間話のいずれにおいても認められたことは、それが、研究者の質問に対する回答や談話調査に特有の現象とは限らず、「話す」という行為一般に広く認められる性格と考えてもいいのかもしれない。そうなると、話とモノの関係もまた別のかたちで理解が可能になる。それは、話の側から見ると、話し手の身の回りにある総てのモノが話の中で言及されるのではなく、話し手の過去への意識、歴史認識と響き合うモノが言及されるのではないかということである。民具調査の際に、民具について使用者や所有者に尋ねても、きちんとした話を聞けない場合は意外に多い。呼称ですらわからないといわれる場合もある。大門哲に倣っていえば、談話が弾む民具と弾まない民具があるのである。こうした事態は、こちらの質問が良くなかったり、相手がその民具に関する知識や情報をほとんど有していなかったりということが原因の場合も当然であろうが、話そのものに備わっているそうした性格に拠ると考えることもできるかも知れない。

## 8 大村しげコレクションを巡ることば

以上、ことばとモノの関係について、従来の民俗学における民具や口頭伝承の研究の成果を通じて考えてきた。その結果、民具の調査や研究においては、呼称やそれに関する人々の話といった民具に関することばに多大な関心が寄せられ、論じられてきたこと、民具自体と民具に関することばは直線的に結び付くのではなく、その使用者や所有者が属する社会や集団の地域的・歴史的な位相や、その人々の意識や意図に応じて多様な結び付き方が見られること、民具に関する話を巡っては、民具自体に備わった道具としての実用的な知識や情報に止まらず、使用者や所有者が過去に獲得した知識や体験が、質問や談話を契機として再構成された話し手の反省的な自己主張や自己確認的な内容となる場合が少なくないこと、伝説から世間話に至るまで日常生活において人々が話す行為は、先例や経験を再構成して言語化したものとして、人々の過去に対する意識や歴史認識と深く関わっていて、具体的な事物やモノの存在を介してその内容の歴史的な正統性やリアリティーの強化が促進されてきたこと、その場合、話において言及されるのは人々の過去に対する意識や歴史認識と親和性を有するモノで、一旦関係が成立すると、話がモノを生み出すと共にモノが話を生み出すという双方向的な作用が発効することといった諸点を明らかにすることができた。

こうしたことばとモノの関係に見られた特徴は、調査や研究を行う者がモノ自体の形態や機能などについて自ら資料化した情報以外に、モノの使用者や所有者、あるいはその他の関係者から、ごく簡単な事実確認を越えて、詳細な質問や談話を通じて聞き取った知識や情報を資料として用いて調査や研究を進める際には、大なり小なり関わってくると考えられる。従って、こうした特徴を踏まえて人々から聞き取ったことばを吟味し、これから行う自らの調査や研究の目的や方法と照らし合わせて資料としての有効性の有無を確認することは、資料批判として欠かすことのできない重要な作業となってくるはずである。そしてそれは、国立民族学博物館が収集し、整理を完了した大村しげコレクションの約4万5千点に及ぶ膨大なモノの群に関しても基本的に変わらない。それぞれのモノは、大村しげを初め、コレクションに関わる様々な人々が発することばと、本稿で検討してきたような一筋縄ではいかない錯綜した関係を取り結びつつ存在している。原理的にはそう考えるべきであろう。

大村しげコレクションを巡るモノとことばの関係を考えた時、先ず注目されるのは、彼女は身の回りのごくありふれたモノを意図的に棄てずに残したこと、そして、彼女自身は既に故人となっていて、残したモノに関する話を直接聞くことは不可能であるが、文筆家として自らの著作の中でモノについて多くの言説を残していることである（横川 2003a: 4-5）。ところが、残されたモノとそうした著述の間には「ずれ」が認められる（横川 2003b: 7）。例えばその量である。前述のように大村しげコレク

ションのモノの総数は4万5千点に及ぶが、そのうち著作の中で言及されているのはごく僅かに過ぎない。それでは、どのようなモノが著作に登場するかというと、いかき・ささら・金網・みそこしなどの台所用品を初め、多くは今ではあまり見られなくなった一昔前の道具類や手作り品が多くを占めている。現代の電化製品や工業製品が登場しても、それは否定的文脈で言及されている場合が多い。その結果、彼女の暮らしぶりが、「もっさりした」という明治・大正のままのモノの世界」（横川 2003b: 7）でもあるかのような印象を受けてしまう。しかし、コレクションには多くの電化製品や工業製品が含まれていた。実際の彼女の暮らしでは、プッシュホン式の電話器・冷蔵庫・オーブントースター・合成樹脂製の食器類が使われていた。彼女は文明の利器と無縁な昔のままの暮らしをしてきたわけではなかったのである（笹原 2002: 31）。こうした大村しげコレクションを巡るモノと著述のずれが、人々の過去への意識や歴史認識と話とは密接な関係があり、話の中で言及されるのは過去への意識や歴史認識と親和性を有するモノであるという、先に見た話、即ちことばの世界とモノの関係のありようと合致することは注目される。彼女が新たに使い出した電熱器用に、五徳代わりの足つき金網を注文して使い出したのも（横川 2003b: 7）、彼女が著述した昔ながらの暮らしぶりということばの世界が実在のモノを産み出したと考えれば、ことばとモノの双方向的な影響関係がここでも認められることになり、両者の合致の度合いは一層高まってくる。

## 9 話されたモノと記されたモノ

しかし、両者を全く同一視しても問題がないかといえ、そうとも言い切れない。というのは、本稿で検討してきた民具を巡ることばとモノの議論は主として口頭表現によることば、話しことばの世界に関するものであったのに対して、大村しげコレクションの場合は彼女の著述、書きことばの世界に関するものという違いがあるからである。彼女は、自らが大事にすべきと価値を認めた昔ながらの暮らしぶりを、後世に伝えるために意識的に記述し、その中でモノに言及していた（横川 2003b: 7-8）。そうした彼女のモノに関する記述は、個人的な思考に基づくことばによる表現という意味で、口頭表現と同列に考えることも可能かも知れないが、やはり、話しことばと書きことばの差異は看過できない。

W・J・オングは、声の文化、話しことばの世界から文字の文化、書きことばの世界へという歴史的な流れにおいて両者を比較検討し、文芸や学問など、古今東西の様々な文化の生成や展開とことばの関係を論じているが、その中で、声の文化と異なる文字の文化の「力学」を次のように指摘している。文字の文化は、声の文化が依存していた生活世界の様々なコンテクストから切り放され、それのみで孤立した存在と

なったが、それによって状況依存的な体質を払拭し、その結果、ことばの使用が相手を必要としない個人的な営為となると共に、その一方で、対面的な人間関係を越えた広範な普遍性を持つようになった。また、そうしたコンテクストからの隔たりは、言語表現の次元でも様々な変化をもたらした。文字の文化では、声の文化では困難であった大量の語彙の獲得や表現の慎重な吟味や訂正が可能となり、ことばの表現技術としてのレトリックも高度に発達した。その結果、正確で厳密な言語表現が可能となり、明晰な思考・分析・論理化・抽象化が行われるようになった。そしてそれが、書くことだけに止まらず話すことにもフィードバックして、個人的な内省的活動が一層文節化され、思考が深化するというかたちで、人間の意識のあり方自体を変えてしまった。言語芸術や言語表現においては時間的経験をことばで表す「物語」が基本となるが、声の文化では、物語が最初に核心の事柄で始まり挿話を積み重ねていく単純な構成をとっていたのに対して、文字の文化では、作家が物語を、自己完結的で閉じられた1つの世界で、作品として自ら意識的に統御し得る対象と見るようになり、その結果、挿話を適宜取捨選択してクライマックスに向かうプロットを強化するような複雑な構成や構造をとるようになったという<sup>10)</sup>。

こうしたオンガが指摘する話しことばの世界と書きことばの世界の差異は、大村しげのモノに関する著述とも恐らく無関係ではない。例えば、文字の文化が個人的な内容の表現行為でありながら、脱コンテクスト的に広範に流通して普遍性を帯びるという指摘は、自らが食べたり調理法を習いおぼえたりしてきた食べ物を記した『大村しげの京のおぼんざい』（大村 1980）や、彼女が自らの暮らしぶりを記した『京暮し』（大村 1987）が、京都という具体的な場所における彼女の生活から離床して、マス・メディアを介して全国的に流通し、多くの人々の共感を得たことと符合する。また、文字の文化においては、作家としての書き手が挿話の意図的な取捨選択などによる内容や構成の統御によって、閉じられた1つの世界としての物語を作り上げるという点は、実際に残されたモノの内容と必ずしも合致しない、彼女の著述における昔ながらの暮らしぶりの出現という、コレクションと記述のずれを考える際に有効な補助線となるであろう。更に、書くことが人間の個人的な内省活動や思考を深化させるという指摘は、彼女のモノに関する叙述が、新聞に政治や社会のあり方に目を向けた作文を投稿する「大村重子」という「一主婦」から、日々の衣食住を初め、身の回りの当たり前のことを当たり前に書こうとした随筆家「大村しげ」へと変貌を遂げた後に現れたという（横川 2003b: 6）、彼女の物書きとしての思考や行動の遍歴を考える上で示唆的である。

こうした様々な点を考慮すると、大村しげのモノに関する著述を理解するには、話しことばの世界と書きことばの世界の差異を十分踏まえる必要があることがわかってくる。彼女は、京都の人々が日々の生活において口頭表現として用いる「京ことば」

を用いて多くの著述を行った。モノに関する著述も例外ではないが、だからといって、話しことばと書きことばの差異が解消されるわけではない。確かにそれらは、標準語を用いた著述と比べれば、語彙や表現の面において彼女の日常生活と共通性が高く、その意味では口頭表現に近いといえる。しかし、彼女が京ことばを用いるようになったのは、一主婦から随筆家という書きことばの専門家化を遂げた後であった（横川 2003b: 6）ことを考えると、やはりそれは、ことばの表現技術としてのレトリックの高度な発達という、文字の文化の力学の発現として理解すべきかも知れない。

## 10 おわりに

本稿では、まず初めに、民具研究を初めとした民俗学におけることばとモノの関係に関する研究の成果を検討し、そこで得られた視角が大村しげコレクションとそれに関する彼女の著述に対しても一定の有効性が認められることを確認した。更に、彼女のコレクションと著述を巡っては、それに加えて口頭表現と文字表現の差異を踏まえて検討を行うことが必要であることを明らかにした。しかし、それを踏まえた上で、実際にどのようなかたちでことばとモノの関係を理解すべきか、そして、そうした関係に基づき、コレクションを構成する膨大なモノの群をどのように把握し、理解することができるかといった点に関しては、本稿では簡単な見通しを示すに止まったことは前述の通りである。彼女が残したモノに関する著述を精査し、それに対応する、あるいは対応しない実際のモノのあり方と比較検討し、分析するという具体的な作業はほとんど手付かずで残っている。今後の課題としたい。

また、本稿では、モノの使い方・作り方・入手の経緯・維持管理の仕方といった機能や履歴に関する基本的な情報を伝える人々の話のように、モノとことばが割合直線的に結び付く場合については必ずしも十分に議論を尽くしたわけではない。しかしそれは、両者の直線的な結びつきを無批判に前提とすることによって生じる問題点を顕在化させるために、敢えてそうした姿勢をとったに過ぎず、両者の直線的な結びつきを決して否定する意図はない。個々のモノについて使用者や所有者から基本的な情報を聞き取り、それらがそもそもどういうモノかを確定していく作業は、モノ研究の基本として重要かつ不可欠であることは言うまでもない。モノに対してその実用性や道具感覚に焦点を定めて研究を行う場合のように、研究の目的や方法の設定如何では、そうしたモノと直線的に結び付くことばこそが第一義的な情報となる場合も当然出てくる。

しかし、モノとことばを巡っては、どんな場合であっても、本稿で検討してきた両者の直線的には結び付かない複雑な関係を巡る様々な問題と、程度の差はあれ無関係ではあり得ない。モノとそれに関する人々の言説を包括的に把握して、モノ研究、あ



るいはモノを通じた生活文化の研究を進める場合、より有効性の高い資料論や方法を鍛え上げていくには、こうした認識から始めるしかないと思われる。

## 注

- 1) 澁澤敬三は、民具を「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した日常卑近な道具」と定義した（アチック・ミュージアム 1936: 1）。その後、現在に至るまで、宮本常一を初め多くの研究者が民具を様々なかたちで定義してきたが、大なり小なり澁澤の定義が基となっている。加えて、筆者の見るところ、澁澤の定義が日々の生活現場において存在するモノを文化の問題として対象化するにあたっては、最も実態に合致している有効性が高い。従って、本稿では、民具を澁澤に従って緩やかに定義しておく。
- 2) 柳田國男は、「口承文芸史考」（柳田 1968）・「国語史新語編」（柳田 1969）などにおいて、命名と造語に関する議論を展開している。
- 3) 以上、大門哲の所論と引用に関しては、大門哲「「湯」研究の可能性——あるいは「民具」学の不可能性——」（大門 1999）に拠った。
- 4) 例えば、民具を「すべて人間の手足によって動かし得るものと考え、その民具は人間のあらゆる行動、行為の延長上にあるものとして、人間の行動の目的に添って分類して考える」（宮本常一 1979: 164）という宮本常一の立場は、まさにそれにあたるであろう。但し、筆者はそうした実用面から民具を見る立場を否定しているわけではなく、むしろ必要であるし、研究の方法として一定の有効性を認めている。ただ、そうした立場からの取り組みのみでは十分ではないということである。
- 5) 以上、香月洋一郎の所論と引用に関しては、香月洋一郎「道具とその社会」（香月 2002）に拠った。
- 6) 以上、小池淳一の所論と引用に関しては、小池淳一「〈伝説〉と〈歴史〉」（小池 1997）に拠った。
- 7) 以上、鈴木正崇の所論と引用に関しては、鈴木正崇「祭祀伝承の正当性——岩手県宮古市の事例から——」（鈴木 2004）に拠った。
- 8) ここでは世間話を、「現代に生きている人々が生活の中で他者との関係性のなかにおいて発する言説全て」（小池 1995: 65）というかたちで広く定義しておきたい。
- 9) 以上、山田巖子の所論と引用に関しては、山田巖子「世間話と聞き書きと」（山田 1997）に拠った。
- 10) 以上、W・J・オングの所論に関しては、W・J・オング『声の文化と文字の文化』（W・J・オング 1991）に拠った。

## 文献

アチック・ミュージアム

1936『民具蒐集調査要目』。

天野武

1983『民具のみかた——心とかたち——』東京：第一法規。

内田武志

1941『静岡縣方言誌 分布調査 第三輯 民具篇』東京：アチック・ミュージアム。

榎美香

2002「民俗知識による民具分類へのアプローチ——房総半島南部の鋤を例として——」『民具研究』125: 1-26。

大村しげ

1980『大村しげの京のおぼんざい』東京：中央公論社。

1987『京暮し』東京：暮しの手帖社。

香月洋一郎

2002「道具とその社会」香月洋一郎・野本寛一編『講座 日本の民俗学 9 民具と民俗』pp. 147-172, 東京：雄山閣出版。

神野善治

1985「民具の名称」岩井宏實他編『民具研究ハンドブック』pp. 16-23, 東京：雄山閣出版。

小池淳一

1995「世間話と伝承 付〈資料〉弘前の学生たちのこわい話」『弘前大学人文科学特定研究報告書 境界とコミュニケーション』pp. 57-58, 青森：弘前大学人文学科特定研究事務局。

1997「〈伝説〉と〈歴史〉」『岩波講座日本文学史第17巻 口承文学(2)；アイヌ文学』pp. 117-134, 東京：岩波書店。

河野通明

2000「農具から聞いた古代人の話」宮田登編『ものがたり 日本列島に生きた人たち 8 民具と民俗 上』pp. 16-56, 東京：岩波書店。

2003「絵引はつくれぬものか——歴史への視点——」『民具研究』128: 24-30。

笹原亮二

1993『さがみはらの農具』神奈川：JA 相模原市。

2002「京都のおばあちゃんの部屋」*Japan, Our Closer Neighbour Soul: The National Folk Museum of Korea* pp. 30-31.

佐藤健二

1997「「はなし」と現代」『岩波講座日本文学史第17巻 口承文芸(2)；アイヌ文学』pp. 157-179, 東京：岩波書店。

渋谷敬三

1933『祭魚洞雑録』東京：郷土研究社。

1935「アチック根源記(二)」『アチック・マンズリー』2: 1。

1958『日本魚名集覧』東京：角川書店。

1959『日本魚名の研究』東京：角川書店。

鈴木正崇

2004「祭祀伝承の正当性——岩手県宮古市の事例から——」『法學研究』77(1): 185-235。

大門哲

1999「「濁」研究の可能性——あるいは「民具」学の不可能性——」『民具マンズリー』31(11・12): 31-46。

中村たかを

1981『日本の民具』東京：弘文堂。

藤原与一

1959「命名と造語」『日本民俗学大系 第10巻』pp. 229-248, 東京：平凡社。

宮本馨太郎

1979『図録民具の基礎知識』東京：柏書房。

宮本常一

1979『民具学の提唱』東京：未来社。

民俗学研究所

1955『改訂 総合日本民俗語彙 第1巻』東京：平凡社。

柳田國男

1955「序」『改訂 総合日本民俗語彙 第1巻』pp. 1-6, 平凡社。

1968『定本柳田國男集 第6巻』東京：筑摩書房。

1969『定本柳田國男集 第18巻』東京：筑摩書房。

1980『民間伝承論』東京：伝統と現代社。

山田巖子

1997「世間話と聞き書きと」『岩波講座日本文学史第17巻 口承文芸(2); アイヌ文学』pp. 137-156, 東京：岩波書店。

横川公子

2003a「モノはモノにしてものにあらざ——大村しげコレクションから見えるもの」『民博通信』101: 5。

2003b「大村しげの虚構性——著述から見た大村しげコレクション」『民博通信』101: 6-7。

W・J・オング 桜井直文・林正寛・粕屋啓介訳

1991『声の文化と文字の文化』東京：藤原書店。

ウィリアム・ギブソン 額田やえ子訳

2003『奇跡の人』東京：劇書房。